

京都芸術 センター 通信

KYOTO ART CENTER
NEWSLETTER

August 2018
Vol.219

発行 | 京都芸術センター
2018年7月20日

08

キウチ、 ゲイセンで 個展するってよ

TOPIC 01

FOCUS#1

キウチ芸術センター展

京都芸術センターの展覧会「FOCUS」は、着実に制作・発表を続ける中堅アーティストに焦点をあて、個展形式で紹介するシリーズです。一貫した制作テーマ、新たな作品への展開、社会へのアプローチなど、それぞれのアーティストが持つ問題意識にじっくり向き合い、鑑賞者と作品の対話を促す場となることを目指します。

第一回目となる本年度は、京都を拠点に活動を続ける木内貴志を紹介いたします。木内は素材や技法を限定せず、日常に埋もれた物事や、現代社会や美術における制度の矛盾などを、駄洒落や皮肉を織り交ぜて造形化します。展覧会に先駆け、制作の背景についてインタビューしました。

— 木内さんにとって、『キウチ芸術センター展』はどのような位置づけの展覧会でしょうか。

自分のキャリアのなかで十年ぐらい前から京都芸術センターでやりたいなど、例えば、ギャラリーでの発表からはじめて、いろんなグループ展とか、賞を取ったりしてあって、発表の舞台が一番大きいのが美術館だとすると、その中間にあるのがセンターだと思うんです。そういうこともあって、そろそろセンターでやりたいと思っていたものの、実際どうしたらいいかわからない。そんな時期にちょうど展覧会の話をもりました。

— 「センター」をテーマに設定した背景について。

そういえば「センター」という言葉を普通に使っているけど、そもそもどういう意味なんだろうと考えたときに、いろいろな意味が含まれているなと思いました。日本語に訳すと「中心」だけど、場所を指したり、ポジションのことだったり、頻繁に使う割にどこかモヤモヤしたところがある。京都芸術センターもそうだけど、「なんで『センター』だけカタカナ語なのか」とかあまりツッコまれないでいる。そう考えると面白いテーマになるなと思いました。

— 京都芸術センターと関わるきっかけは何だったのでしょうか。

芸術センターができる前に「アートアクション京都」(※1)というのがあって、当時、大学を卒業したばかりだったので、制作室をアトリエとして使っていました。そのときは制作室にあった学校机から着想を得て、天板を版木にした版画を摺りました。

それからしばらくして、もっとたくさんの机を使った作品をつくりたいと思い、センター開館後の2001年に再びセンターの制作室を使うことになりました。とりえず中古の学校机をまとめて買ってみたら、つくりが最近のもので、コーティングが固くて上手く彫れない。

当時の担当者に「相談だけど、ここの明倫小学校時代の古い机と新しい机を交換できませんか」って訊いたら、「まあ、それならいいんじゃないか」となって物々交換した。それでちょっとポロい、落書きがあるような机を手に入れたんです。その頃から割とゲリラ的にやっていて、なんとか上手くやってこれました。



《中学性日記(モザイクとレジェンド)》2009 撮影：加納俊輔

実は「作家ドラフト」(※2)に応募したこともあり。今回、ギャラリー北で展示する「中」と「心」の文字を使った作品も作家ドラフトで落選したプランを基にしています。そういう意味では、やっとセンターで「中心」の作品を発表できる。実は長いあいだ構想していた作品です。

— 初展から昨年で20周年を迎えられたとのことですが、制作を続けていくコツとは。

最近になって周囲からブレない人という扱いをされるが多くなりました。自分では、ブレない人間だと思っているんですけど、ブレないというのは、成長していないというこ

ともかもしれないけど、それでも20代前半からあった、「売りたい」とか「名を成したい」というこだわりが最近ではだいぶ薄れてきました。2006年の「gallerism」(※3)に招待作家として呼ばれたときに、「ああ、これを一生やれたらそれでいいな」と思う瞬間があったんです。それから無敵ゾーンというか、苦勞することもあるんですけど、いかにこのスタイルを続けられるかを考えるようになりました。

— 最後に展覧会への意気込みを聞かせてください。

「この人面白いね」と言われるような作品をつくりたいですね。どれだけ新作で面白く、レフトもライトもないのか「センター」だけでできるか。そこからまた新しい展開に繋げていきたいです。

※1 アーティストにアトリエや稽古場として制作室を提供し、地域の理解を深めるとともに試行結果をアートセンター検討委員会に反映させることを目的とした京都芸術センター開設前の試行事業。

※2 美術に限らず各界の第一線で活躍する方を審査員に招き、新しい表現を試みる若い才能を発掘し展覧会を開催することを目的とした京都芸術センター事業。

※3 大阪の画廊が中心となって企画するアートフェスティバル。

日常生活のなかで頻繁に遭遇する「センター」という言葉。外来語でありながら、日本社会に溶け込む独特の語感、便利であるがゆえにどこか思考を停止させる響きがあります。そんな「センター」のモヤモヤした部分をテーマに、すべて新作で構成される本展。作家のウィットに富んだ表現に注目です。 松井正(アートコーディネーター)

Profile

木内貴志 (きうち たかし)

1973年京都市生まれ。成安造形大学造形美術科造形表現群洋画クラス修了。同研究生修了。手法や作風を限定せず、絵画や立体はもとより、企画性の強いイベント的行為作品など、様々な表現で社会や制度と個人の問題を作品化し「キウチズム」なる個人イズムの確立を追求している。主な個展に『琳派四〇一年記念 リンパなキウチ展』(Gallery PARC、京都、2016)、『木内妄想芸術大学作品展-独りホームカミング-』(成安造形大学【キャンパスが美術館】、滋賀、2016)、『キウチトリエンナーレ2004・名前と美術』(GALLERY wks.、大阪、2004)など。主なグループ展に『Drawing Exhibition 2017』(C.A.P KOBÉ STUDIO Y3、神戸、2017)、『ラジドク!-Radio Documenta-』(KUNST ARZT、京都、2013)、『愛の秘密工作室』(HEP HALL、大阪、2011)、『Art Court Frontier 2010 #8』(ART COURT Gallery、大阪、2010)、『After School 放課後の展覧会』(元立誠小学校、京都、2009)など。



『木内妄想芸術大学作品展-独りホームカミング-』
(成安造形大学【キャンパスが美術館】、滋賀、2016) 撮影：加納俊輔

「木内妄想芸術大学作品展-独りホームカミング-」
(成安造形大学【キャンパスが美術館】、滋賀、2016) 撮影：加納俊輔

FOCUS#1

『キウチ芸術センター展』

日時：7月27日(金)–9月9日(日)

10:00–20:00

※8月14日(火)–16日(木)は休館

※入場無料

会場：ギャラリー北・南

【関連企画】

ギャラリーツアー

日時：7月28日(土)17:00–18:00

会場：ギャラリー南

※無料・事前申込不要

オープニングパーティー「木内貴志を囲む会」

日時：7月28日(土)18:00–19:00

会場：ミーティングルーム2

※入場無料・事前申込不要

ワークショップ「キウチ芸術センター模試」

日時：8月9日(木)13:00–16:00

会場：ミーティングルーム2

料金：無料

定員：15名(要事前申込)

対象：現代美術に興味のある人(中学生以上)

持物：鉛筆、消しゴム

トークイベント「『現代アート』という言い方が嫌いだ!」

日時：9月8日(土)14:00–16:30

会場：ミーティングルーム2

登壇：木内貴志(出展作家)、齊と公平太(現代美術作家)

※入場無料・事前申込不要

REVIEW

伝統

古刹の本堂で、幽玄の世界に浸る

宇都宮ゆう子

『謡講・声で描く能の世界(第55回) 京の町家でうたいを楽しむ』

6月9日(土)

千本釈迦堂(京都市上京区)

千本釈迦堂で開かれた「謡講」の第一部を拝聴した。この「謡講」は、親世流のシテ方、井上裕久氏と洛語社が催す会で、平たくいうと素謡の会だ。ただ、より趣味性が高い会だと感じた。

たとえば舞台。通常は町家の座敷で披露されるという。というのも、もともと「謡講」は江戸時代、京の町衆たちが稽古の成果を発表し合う、謡仲間同士の会であったからだ。今回は町家を離れ、古刹の本堂の片隅にそれが設けられたのだが、観客席が目にする舞臺スペースはわずか二間ほど。ここに仕切りの衝立と、その前に蠟燭を灯した3台の燭台が置かれる。井上氏が曲目を解説する際にこの舞台に登場するものの、演目が始まると謡い手は表には現れない。障子の奥から、謡をうたう。観客は、ただ、声に耳を傾ける。そのため、謡本を片手に一緒にうたうという行為は、誰もしない。ほの暗い中、聞こえてくる声をたよりに、曲の世界に浸る。演者数も最小限だ。しかし、しばしば能楽堂などで開催される素謡の会、いや能そのものよりも臨場感という意味では上なのではないかと感じさせられた。

それを特に実感したのは、シテを井上裕久、ワキを吉浪壽晃、ワキツレを吉田篤史が演じた『鶴飼』だ。禁

関西圏の公演・展覧会について、若手レビューが月替りで執筆します。



撮影：小阪恭子

漁区にも関わらず鶴飼を続け、殺された後に亡者となった鶴使と、それを弔う旅の僧、裁く閻魔大王が登場する。ストーリーを問わず、謡だけで世界観を表現するのは至難の業だ。にも関わらず、生前の罪を悔やみ、身に起こった悲劇を切々と語る鶴使の嘆きには胸が迫り、鶴使に情けをかけ、心を砕く僧たちには心を洗われる思いがした。閻魔大王の言葉の響きには神懸かりを感じ、自然に頭がさがった。

「御堂」という独特の空間の中、皆が前のめりになって物語に浸ったのは、やはり演者の技量によるものだろう。鶴使の霊の行く末を案じ、往生には胸をなでおろし、「他を濟くべき力なれ、他を濟くべき力なれ」と、謡の最後の一語が終えられ、自然に「よっ」と声をかけた。ちなみに謡講では拍手は行われず、「よっ」と低い声をかけるのが定例だ。町家で催される場合、近所迷惑になるという配慮もあるのだろう。

時には笑いも起きた演目もあった。この謡講では独吟や素謡はもちろん、「替歌」ならぬ「替謡」も頻りに発表されている。第一部では、吉浪壽晃が独吟で「景清」をもじった「大食景清」なる替謡をうたったのだが、面白真面目な様子に口元を緩めつつ、江戸時代の京都では、これほどまでに謡が活発であったかを感じさせられた。

(第一部 11:00の回を鑑賞)

うつのみやゆうこ/フリーライター、編集者●7月末に編集協力をした『伊勢の陰陽師が教える 生まれ変わりの謎』(一宮寿山著、三笠書房刊)が発売されます。

ダンス

生まれて、立って、踊るまで ゆざわさな

...1[アマリイチ]『Punk・tuate[パンク・チュエイト]』

5月18日(金)~5月19日(土)

京都芸術センター ミーティングルーム2(京都市中京区)

「punk・tuate」とは、区切るという意味のpunctuateと、「若造」「低俗な」といった意味を持つ「punk」を組み合わせた言葉らしい。「punk」は…1[アマリイチ]の二人のダンサー、斉藤綾子と益田さちからは連想しがたい意外な言葉だった。二人は20代であるが、基礎のある身体から見ごたえのあるテクニックが飛び出す、安定感のあるダンサーだという印象を持っていた。「若造」「低俗」のイメージには程遠く、立ち姿には気品がある。しかし、終演後にはすっかりこのタイトルに納得させられた。

二人は薄ピンク色の、袖なし半ズボンのつなぎを着て、白い靴を履いて現れた。その姿はすらすらとした手足に反して、服装のせいかロンパース姿の赤ん坊のようだ。歩く、走る、見る、といった単純な行為から始まり、それぞれに動いているかと思えば、一緒になって部屋に紐を張り巡らせたりしている。そうした行為は二人の身体に徐々にリズムを与えていき、二人は並んでユニゾンで踊り出す。二人の身体には様々なリズムが染みついていることに気づく。バレエ、ジャズダンス、コンテンポラリーダンス。そこにダンス以外の日常で身についた癖のようなリズムも少し。身体の中にあるこれまで経験してきたダンスが、彼女たちを起動させるリズムとなって、今の二人のダンスを立ち上げていく。身体の動きも、行為からダンスへと変化していく。では、行為とダンスの差はどこにあるのか。一つの要素はリズムだろう。それは音楽的なリズムではなく、身体の中に刻まれる鼓動のようなものだ。踊り続けてきた彼女たち

の身体にはダンスするリズムが棲み着いている。もう一つの要素は、意志だ。「ダンスしようとしている」とその身体は、確実にダンスを始める。赤ん坊のような姿で登場した二人は、行為を通してリズムを得て、個人の意志によってダンスすることを選んだのではないか。この作品は、斉藤と益田の「踊ろうとする」意志によって上演された。いつか、意志が揺らいだり、意志が弱まったりした時には、今日見たこれはダンスではなくなってしまうのかもしれない。そう思うと、気持ちが良くらいに青くさい、若造による挑戦だったのかも知れない。

公演の当日プログラムの表紙には「ダンスとダンス以外をダンスで区切るダンス作品」と書かれていた。彼女たちがダンスをダンスで区切ろうと奮闘することで、自ずと彼女たちがダンスを獲得するまでの過程が浮き彫りになった。それは「ダンスしようとしている」身体をそこに立ち上げる行為のように思えた。ダンスというのは、きつと唐突にそこに生まれるものではない。ダンスみたいなのが生まれて、それを立ち上げて、歩かせて、何度も転んでは立ち上がって、やっと踊ることにたどり着く、その道のりを見せられたような気がした。この場では、ダンスとダンス以外のものは、おそらく「ダンスしようとしているか」「ダンスに向かっているか」で区切られていた。60分の上演時間、私はそこで確かに「ダンス」を見た。

(5月19日14:00の回を鑑賞)

ゆざわ さな/ダンサー、ダンス講師、The bomb/舞台企画back☆pack主宰●6月9日に東山青少年活動センターで行われた「ダンスの教室」に参加しました。ダンスについて考える場、ダンスについて自由に語る機会が作られることに、危機感と期待感を感じたゆざわでした。



撮影：藤崎智史

美術

風の彼方

平田剛志

寺岡海 個展『A Wind #2』

5月12日(土)~6月3日(日)

2kw gallery(滋賀県大津市)

風はどんな音をしているだろうか。「どっどど どどうど どどうど どどうど 青いくるみも吹きとばせ/すっばいかりんも吹きとばせ」と書いたのは宮沢賢治の『風の又三郎』であった。賢治は、躍動感あるオノマトペによって見えない風を表したが、美術においてはどうか。

寺岡の『A Wind #2』は、「風」を視覚と聴覚によって立体的に造形化した作品だ。会場に入ると、木材でできた四角い巨大な立方体が天井から吊り下げられている。内部には一回り小さな立方体にスピーカーが取り付けられ、音が響いている。これは、山の稜線18ヶ所で録音した風の音を18チャンネルのスピーカーから再生した音の反響なのだ。大量の黒いケーブルがとぐろを巻き、風音が轟音で鳴り響く立方体は、さながら実験装置のようだ。さらに風音の波長の映像や鉛筆の掠れや濃淡で疾風が描かれたドローイングも展示され、異なるアプローチによって見えない「風」が行き交う。

寺岡はこれまで人と世界の「あいだ」にあるものを観測し、集合化する作品を制作してきた。《雲を反対側から同時に撮影する/2011年9月13日12時15分》(2011)は、一つの雲を異なる場所から観測し、写真や地図などを用いて多角的に提示した。以後も寺岡は星や忘れ物、夢、寝顔、手など人の意識の及ばない自然や身体、無意識に着目した作品を制作してきた。これら寺岡作品に共通するのは、見えないものに想像を馳せるロマンティシ

ズムと遊戯性だ。

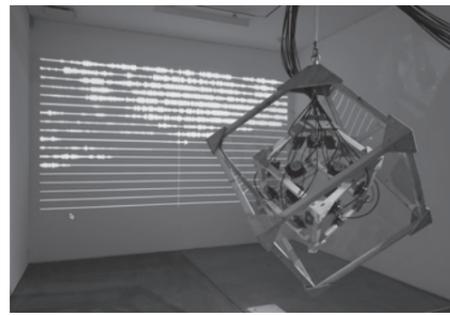
遊戯とえば、1967年から関西を拠点に活動する美術家集団プレイ(THE PLAY)を想起する。矢印型のイカダに乗って京都(宇治川)から大阪(堂島川)を流れる『現代美術の流れ』(1969)、山頂に三角塔を建てて落雷を10年間待った『雷』(1977-1986)、北海道・サロベツ原野を風が吹いてくる方向へ向かって5日間歩いた『風: WANDERING IN THE WIND』(1976)など、身体行為を資料や写真、映像、音声記録、印刷物で発表する形式は寺岡にも通じる。

だが、プレイと寺岡は風向きが異なる。プレイは美術館やギャラリーを出て、野外をフィールドに集団で「行為(プレイ)」する。一方、寺岡は雲や風の認知や人の意識の内外で起こる「作用(プレイ)」を単独でフィールドワークする。どちらも見えないものを身体で探求する点では同じだが、寺岡は一過性のパフォーマンスではなく、形を見出すことを志向しているからだ。

見えない「風」を可視化するとは、風狂な振る舞いである。かつて、宮沢賢治は地学的、神話的な創造力によって風の物語を生み出したが、寺岡は気象学的、心理的

な観察と想像力によって現実と精神の二つの世界を流れる「風」を造形化した。自然と人工、意識と無意識、可視と不可視のあいだを行き交う風は、次第に境目が見えなくなっていく。この風はどこから現実で想像なのか。その答えは風の中に舞っている。

ひらた たけし/美術批評●ウェス・アンダーソン監督の『犬ヶ島』TOHOシネマズ二条で見ました。未来の日本を舞台にした奇想溢れるストップモーションアニメの傑作でした。一時停止したくなるくらい作り込んだ日本イメージには驚嘆です。



EVENT CALENDAR 8/1 ▶ 8/31

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31			
wed	thu	fri	sat	sun	mon	tue	wed	thu	fri	sat	sun	mon	tue	wed	thu	fri	sat	sun	mon	tue	wed	thu	fri	sat	sun	mon	tue	wed	thu	fri			
FOCUS#1「キウチ芸術センター展」(7/27-9/9)														休館																			
														● FOCUS#1「キウチ芸術センター展」 ● 【関連企画】ワークショップ「キウチ芸術センター模試」																			
														● 夏休み能楽体験教室-発表会-(於: 大江能楽堂)		● トラディショナル・シアター・トレーニング ● 2018 成果発表会(於: 大江能楽堂)		● 京の文化絵巻2018															
														● [明倫WS] 安住の地「もしも夏に上演する戯曲の舞台が北極だったら」		● [明倫WS] 三原聡一郎「電子工作ワークショップ」																	
														● [明倫WS] 空降る鮎玉社「スタッフとして劇団や作品づくりに携わる」																			
														● [明倫WS] 広田ゆうみ+二口大学「からだて本をよむ13」																			
														● [KACセレクション] イメージフォーラム・フェスティバル2018																			
														● [KACセレクション] Cosmo Projekt 2018 ● Zeitgenössische Musik - ゲンダイの打楽器オンガクvol.2 -																			
														● 第11回 森悠子のプロペラプロジェクト ~子ども音楽道場~																			
														● [明倫WS] まいやゆりこ「赤ちゃんの遊びを見つけておうち! ~赤ちゃんの体が舞台の“手遊び”集~」																			
														● 「1歳~2歳さんと楽しい遊びを見つけておうち! おはなし」こまった こまった パンダちゃん」																			
														● [明倫WS] トランク企画「インプロ(即興演劇)ワークショップ「YES ANDで遊ぼう!」																			

設備点検に伴う休館のお知らせ
期間: 8月14日(火)~16日(木)

図書室休室日: 8月31日(金)

TOPIC 02

アーティスト・イン・レジデンスプログラム2018：
 エクスチェンジ／ARTSPACE

招聘アーティスト：ガーウィン・デイビス
 派遣アーティスト：佃七緒



バルセロナでの滞在制作の様子

佃七緒《住まいと交わす18通の手紙》2018



Gerwyn Davies 《Idol》2018
 Courtesy of the artist and Jan Murphy Gallery Brisbane

Profile

ガーウィン・デイビス (Gerwyn Davies)
 滞在期間：8月1日(水)～9月30日(日)

1985年イブスウィッチ(クイーンズランド州、オーストラリア)出身。自作衣装によるポートレートを撮影し、写真作品を制作。自身のカタログページを更新するという感覚で独自の衣装を着用し、カメラの前に立ち続ける。物質世界におけるデジタル表現の虚構性の中で、どのように自己表現をし続けることが可能であるのかを問う。

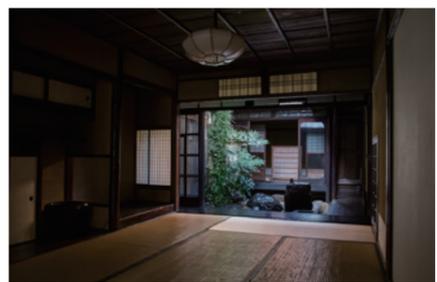
佃七緒 (つくだ ななお)

滞在期間：7月22日(日)～9月20日(木)

1986年大阪生まれ。京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。他国での短期滞在を行い、リサーチベースの制作を行う。個人の日常の出来事や習慣、大事にしている言葉などの文字情報や、生活環境にある物や空間の形状・機能などの視覚情報を抜き出し、見ええはあるが見慣れない空間の制作を目指す。2017年8月米国・ポートランドにてEnd of Summerレジデンスプログラムに参加。

京都芸術センターでは今年度より、Australia Council for the Artsとのエクスチェンジプログラムを始めます。両機関が公募によって選出したアーティストを、京都とシドニーそれぞれの都市へ派遣し、2ヶ月間の滞在制作を行います。

京都芸術センターには宿泊設備がありません。過去にレジデンスプログラムに参加したアーティスト達には、近隣のマンションなどを滞在期間中に提供していましたが、とはいえ折角京都に滞在するのだから、風情のある場所に住んで



ANEWAL GALLERY 内観

みるのもレジデンスの貴重な体験ではないでしょうか。そこで本プログラムではANEWAL GALLERY(上京区)と連携し、アーティストの滞在制作をサポートします。

ANEWAL GALLERYは、元々錦糸問屋だった築130年の京町家を改修し、展覧会やトークイベントなどアートプロジェクトの企画と運営を行うオルタナティブ・スペースです。今回ここで、オーストラリアより招聘する写真家、ガーウィン・デイビスが生活します。彼は日本の伝統芸能における衣装に着目しリサーチを行う予定です。数々のポートレート作品を発表するデイビスですが、その衣装は全て自作のもの。衣装といっても、服というより「素材」をまとうと表現した方が適切かもしれません。自らの身体を衣装でほとんど覆い隠してしまう独特の表現方法によって、ポートレートの概念を革新してゆきます。ANEWALの位置する西陣地区で織物の歴史や文脈に触れることで、彼の創作にどのような化学反応が起こるのか期待が高まります。

一方、京都芸術センターから派遣するアーティストの佃七緒は、京都市立芸術大学を修了後、ペルーやコロンビア、米国・ポートランド、スペインなど様々な場所での滞在制作を経験しています。陶芸をバックグラウンドに持つ彼女は、その土地固有の「粘土」がどのように人々の生活に結びついてきたのか日々の暮らしを丹念に観察しながら、制作活動を行ってきました。この滞在では、オーストラリアにおける移民と先住民の関わりについて、シドニーという都市の視点からリサーチを行います。また、彼女がシドニーで拠点とするのは、ARTSPACEという波止場沿いにあるアートセンターです。宿泊スペースを完備したスタジオで、生活と制作が交わる環境に身を置くことで、土地とアーティストの一時的な関係の結び方に、より自覚的になるでしょう。佃が現地から何をもち帰ってくるのか、非常に楽しみです。

//////////
 ガーウィンさんは制作室1(北館1F)を利用します。フレンドリーなお人柄なので、見かけたら気軽に声をかけてみてください。
 平野春菜(アートコーディネーター)

TOPIC 03

トラディショナル・シアター・
 トレーニング2018
 今年も始まります！

トレーニング期間：7月18日(水)～8月9日(木)
 成果発表会：8月10日(金)



photo by Shimada Yoshitaka

真夏の京都に国内外から参加者が集い、約3週間に及ぶ伝統芸能のトレーニングを行うトラディショナル・シアター・トレーニング(T.T.T)。能・狂言・日本舞踊の3コースに分かれ、プロの講師による稽古を通じて演目の習得、そして日本の伝統芸能の精神を学び、最終日には大江能楽堂で発表会の舞台に立ちます。今年で34回目のT.T.T.は、複数回参加する方が多いことも特徴の一つ。2016年から3年連続で参加するカナダ出身の作家・演出家の、キョン・ミンさんに話を聞きました。

—T.T.T.に応募したきっかけはどのようなものでしたか。

友人にT.T.T.について聞き、日本の伝統芸能が実践的に学べる貴重な機会だと思いました。能についての本や映像から、理論や学術的な見解は学んでいましたが、演者のスキルを体得したかったのでぴったりでした。加えて、発表会で能舞台に立てることも魅力でした。

—ミンさんは、2016年に能、2017年と今年は日本舞踊コースを受講します。これらの芸能に触れたことはどのようにご自身の活動に影響していますか。

能からは、シンプルな動きを丁寧に捉えることを学び、俳優・作家として、大きく影響を受けています。以前の創作では、作品に何を加えるかを考えていましたが、今は、最小限でシンプルに核心を表現する方法を自身に問うようになりました。また、芸能の儀礼性についても考えさせられ、演者が芸能を敬うこと、そして、演者同士が互いを尊重し合うことで、よりよい舞台を実現できるのだと学びました。日本舞踊は、身体言語の全く違う世

界で、細かな所作や限られた小道具で物語や感情を表現することに苦労しました。少ない小道具で豊かに表現をする日本舞踊は、観客の想像力を掻き立て、その場をまさに劇場にします。

—今年の目標は？

昨年の演目はとても女性的だったので、今年は男性的な表現に取り組めればと思っています。日本舞踊の稽古に戻り、芸を磨くことが待ち遠しいです。

トラディショナル・シアター・トレーニング2018成果発表会

日時：8月10日(金)開場15:30 開演16:00

会場：大江能楽堂(中京区)

出演：T.T.T.2018参加者、T.T.T.2018講師

※入場無料・事前申込不要 ※イベント情報(P2)もご覧ください

Profile

キョン・ミン (Kyungseo Min)

モントリオールを拠点に作家、演出家として活動するかたわら、身体表現を教える。南カリフォルニア大学で演劇の修士号を取得し、ヴェネツィアのオグリ・ボディー・ウェーブ・ラボラトリーで舞踏を、T.T.T.で能と日本舞踊を学ぶ。

//////////
 毎年、発表会の舞台袖から受講生を見ているとこみ上げるものがあります。受講生の努力と講師の先生方の根気強い指導の賜物、ぜひ観にいらしてください。
 堀越芽生子(アートコーディネーター)

TOPIC 04

アーティスト・イン・レジデンス プログラム2019：
 エクスチェンジ／ソウルダンスセンター
 コレオグラファー募集



田村興一郎(SDCに滞在中)のクリエーションの様子

日本のアーティストがソウルダンスセンターに、韓国のアーティストが京都芸術センターに、それぞれ2ヶ月間滞在し、リサーチとクリエーションを行うエクスチェンジプログラムです。2019年8～9月にソウルダンスセンター(SDC)に滞在し、リサーチや作品制作を行うコレオグラファーを募集します。

本プログラムでは、滞在先でのリサーチを中心に据えており、選出されたアーティストは、両施設スタッフのサポートを受けながら、じっくりとテーマに向き合う時間を過ごすことができます。SDCは、スタジオと宿泊施設を併設したダンス専用の施設で、常時国内外のダンサーやコレオグラファーがレジデントアーティストとして活動しています。今回の滞在期間中には、国内外の第一線で活躍するコレオグラファーによる国際振付ワークショップの開催を予定しており、より多くのダンサー、コレオグラファーとの出会いが期待できます。

※募集情報(P2)もご覧ください

//////////
 応募書類は日英併記ですが、英語のハードルはそれほど高くありません。ご応募お待ちしております！
 堀越芽生子(アートコーディネーター)

Since 1971
MAEDA'S COFFEE
 KYOTO ART CENTER 1F
 MUROMACHI, TAKOYAKUSHI
 NAKAGYOKU, KYOTO
 TEL:075-221-2224
 10:00～21:30 everyday

夏休み企画展『感覚のあそび場』
 岩崎貴宏 × 久門剛史
 2016年7月26日～9月11日
 展覧会カタログ 定価 500円(税込)
 京都芸術センター窓口、もしくは下記ウェブサイトよりご注文いただけます。
<http://www.kac.or.jp/shop/>

京都芸術センター



交通案内
 ○市営地下鉄烏丸線「四条」駅／
 阪急京都線「烏丸」駅22番出口・24番出口より徒歩5分。
 ○市バス「四条烏丸」下車、徒歩5分。

開館時間
 ○ギャラリー・図書室・情報コーナー 10:00～20:00
 談話室・チケット窓口 10:00～21:30
 ○カフェ 10:00～21:30
 ○制作室・事務室 10:00～22:00

休館日
 12月28日から1月4日
 ※設備点検のため臨時休館することがあります

〒604-8156
 京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町546-2
 TEL：075-213-1000 FAX：075-213-1004
 E-mail：info@kac.or.jp URL：http://www.kac.or.jp/
 twitter：@kyoto_artcenter
 http://www.facebook.com/kyotoartcenter

